



三重県公立小中学校教頭会

〒514-0003 津市桜橋 2 丁目142

教育文化会館別館 3 階

TEL 059(228)2340

FAX 059(228)2271

E-mail : mieheadt@hyper.ocn.ne.jp

第59回全国公立学校教頭会研究大会埼玉大会

「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育」

きめ細かで質の高い教育を推進し
未来へ飛躍するグローバル人材の育成をめざして

全体会に参加して

津市立南が丘中学校 前 川 正 登

〈郷土文化紹介〉

「なんと素朴で力強いのか」と、小学生と中学生を含めた総勢30人の秩父屋台囃子の演奏は、見事に私を魅了しました。日本の伝統文化の伝承は、地域とのコミュニケーションであり、コラボレーションであるとともに、子供たちの心身を大きく成長させる手段であることも確かです。伝統を支えている皆様に敬意を表したいと思います。

また、合唱曲「旅立ちの日に」の作曲者の坂本浩美先生が、秩父市立影森中学校でこの歌が誕生した経緯を述べられました。さらに、先生の伴奏で豊春中学校の生徒達が合唱するその美しいコーラスに酔いしれ、感動の坩堝に入っ

いました。音楽教育の素晴らしさとレベルの高い教育を見せていただき、先生方の努力の賜物であることを感じました。



〈開会行事〉

今年度は研究主題に「未来を拓く」という文言が入り、第11期の1年目がスタートしたことを今井会長が述べられました。

「自立・協働・創造」をキーワードに、「きめ細かで質の高い教育を推進し未来へ飛躍するグローバル人材の育成をめざして」がサブテーマとして設定されました。

来賓挨拶の中では、埼玉県知事が、小4から埼玉県学力到達度調査を行い、中3まで個々の成長を把握して学力の定着に努力していること、また、リンカーン大統領の例から、協調と自分をおさえるということが人間性を創っていくのだというご祝辞が印象的でした。

さいたま市長のご祝辞では、小1から全校で英語教育を実践していることや働き方改革の事などを話されましたが、特に就任当初から現在までに市内全ての学校を2度訪問されていることに感心しました。

〈基調提案〉

『豊かな人間性と創造性を育み 未来を拓く学校教育をめざして』のもと、長島研究部長から提案されました。

〈全体シンポジウム〉

テーマ 「きめ細かで質の高い教育を推進し未来へ飛躍するグローバル人材の育成をめざして」

コーディネーター

杉田 洋（すぎた ひろし）様

（國學院大學人間開発部初等教育学科教授・日本特別活動学会理事・平成28年～エジプト共和国への特別活動の導入に取り組む）

シンポジスト

勝野 正章（かつの まさあき）様

（全国公立学校教頭会アドバイザー）

小島 奈津子（こじま なつこ）様

（フリーアナウンサー・埼玉県蕨市教育委員）

佐々木 則夫（ささき のりお）様

（十文字学園大学副学長・元サッカー日本女子代表監督）

シンポジストの方々より、それぞれの立場からテーマに関する話題が次のように提供されました。

勝野様からは、「小学校から英語教育が取り入れられ、スーパーグローバルハイスクール（SGH）の指定もあり、語学力を早くから身につけさせようという動きが大きい。しかし、



これからはそれが人材の階層化につながる
ことがないよう、多様性に価値を置き、包括的な共
生社会が求められる。よって語学に加えて認め
合いの心が重要であり、そのためにはコミュニ
ケーションへの意欲が必要となってくる。」

小島様からは、「幼少の頃から、外国籍や特
別支援を要する子どもたちと共に学び、差異を
当たり前と感じ、認め合い自然な形で接するこ
とができるような環境がよいと思う。そして子
どもたち一人ひとりの個性をのばしていくこと
が重要である。」

佐々木様からは、「グローバルの人材を求め
るならば、そのための長期的なビジョンをもち、
企画してアクションを起こす必要がある。指導
者の育成も重要である。サッカー界は世界に通
用する選手を育成するため、長年に渡り努力し
続けてきた。その結果、世界に通用する選手を
育成することができた。またグローバルな中で
日本の良さを生かすことが重要だ。」



杉田様は、「ダウン症の子どもと共に成長し
たある児童の感動的なビデオを提供され、『人
に頼られることは人をあんなに強く優しくする
のだ。』ということや、これからのグローバル
社会で生きていくには語学・学力はもちろん重
要であるが、その前に豊かな人間性・協調性が
必須である。」と述べられました。

全体シンポジウムをはじめ本研究大会での学
びや気づきは、明日からの教育実践に繋がる有
意義なものとなりました。

第1A分科会

「教育課程に関する課題」に参加して

伊勢市立小俣小学校 河村 広之

8月2日からの三日間、全国3200名の副校長・
教頭が「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓
く学校教育」を主テーマに集合した。

初日の郷土文化紹介。秩父屋台囃子保存会に
よる和太鼓の迫力ある演奏と、全国で歌われる
「旅立ちの日に」の作曲者高橋（坂本）浩美教
諭による解説と伴奏で春日部市立豊春中学校混
声合唱団の見事な合唱を聞いた。また、シンポ

ジウムでは、杉田洋・佐々木則夫氏等の興味深
い発言を聞くことができた。

二日目の分科会は、1A分科会「教育課程に
関する課題」に参加する。午前中は徳島県阿波
市中学校教頭会の提言「地域との連携を図り、
地域から学ぶ教育活動の実践に向けての教頭
のかかわり」を基に、午後は、新潟県新発田市・
北蒲原郡小中学校教頭会の提言「地域の教育力

の活用を図る教育課程の工夫に向けて」を基に、グループ討議を行った。

午前は、地域連携による職場体験学習をより深い学びとするために、教育課程にどう位置付けるか報告された。中でも、教科との関連を意識付ける「知の総合化ノート」は興味深かった。学習事項や体験内容を「学びのカード」に記録し、それを整理した物が「知の総合化ノート」だが、これにより生徒の教科での学びと体験活動等との繋がりが視覚化される。

午後は、地域人材の活用を図るため教頭会で人材リストをデータベース化、各校で効果を上げた取り組みを集積しデジタル版実践データ集、これらの活動で共有できる文書データのテンプレート化等が報告された。

何れのグループ討議でも、忙しい日常の中でいかに効率よく仕事を進めるかの視点での討議・情報交換が行われた。日本全国、地域によって違いはあるが、教頭が抱える基本的な悩みは同じことが分かり、情報を共有することができた。

三日目の記念講演は、ニュートリノ振動の発見でノーベル物理学賞受賞の梶田隆章東大宇宙



線研究所長だった。ニュートリノ振動やその発見の意味等難しい事を分かり易く説明され、科学研究の偶然の面白さや関わられた幸運への感謝と、人類共通の新たな知を生み出す研究を説かれた。そして今後の研究は、国際共同研究でチームワークが不可欠なため、小中学校段階からチームワークを鍛える必要性を訴えられた。

三日間を通じ、教頭職の大変さとともに、様々な意見・取り組み・情報に触れ、まだ工夫できる事も多々あると気づけた大変有意義な日々であった。

第1A分科会

「教育課程に関する課題」に参加して

松阪市立豊地小学校 稲垣浩樹

研究大会2日目、第1A分科会は、「埼玉県大宮ソニックスティ展示場」で行われました。参加者は、全国から集まった270名余りの副校長・教頭が44グループに分かれ、2本の提言をもとに熱心に討議が行われました。

1本目は、「地域との連携を図り、地域から学ぶ教育活動の実践に向けての教頭のかかわり」と題して、徳島県阿波市中学校教頭会からの提言がありました。

阿波市中学校教頭会では、市の政策である

「人材こそが『まちの宝』であり、新しい時代を切り拓くたくましい人づくり」のもとに、「地域に誇りをもつ心を育てる教育」を推進されています。中でも保護者や地域との連携の際には、教頭が連絡・調整し、地域の方との連携がスムーズに行えるように、教頭同志が情報交換しながら、連携を図り取り組みを進めている。特に、伝統芸能「獅子舞」が途切れることを危惧し、教頭として中学校の教育課程に位置付け、指導に当たる教師を割り当て、保存会との連絡調整に当たりながら、存続させている姿から、地域連携の核となる教頭の役割の重要性を実感させられました。

2本目は、「地域の教育力の活用を図る教育課程の工夫に向けて」と題して、新潟県新発田市・北蒲原郡小中学校教頭会からの提案がありました。

当教頭会では、各学校の地域連携を支援するために、教頭会に新たな組織(「人材リスト作成部」「情報交換担当部」「専門家招聘担当部」)を立ち上げ、先駆的な取組を共有し、各学校の特色ある教育活動がより充実するよう取り組みが進められている。特に、「新発田市全体の子どもを育てる」という意義を対象者(人材)に伝え、その学校のみならず、広域に活動してもらうよう教頭会で統一した依頼文を作成・発信さ

れている。そして、各学校から集められたデータを基に、家庭科や生活科、総合学習などの教科学習のほかに、読み聞かせや異文化交流など、必要とするカテゴリーで検索できるようにし、整理したデータを各学校で活用できるようにしたことにより、業務の効率化が図られ、子どもと向き合う時間の確保につなげている事に感銘を受けました。

1日間、この分科会に参加し、全国の先生方と交流することで、地域の人的・物的資源を活用して「社会や地域のためにこんなことをしたい」という社会参画意識の育成を図ること、職場のみんなと「社会に開かれた教育課程」を編成していくことの大切さを改めて問い直す良机となりました。ありがとうございました。



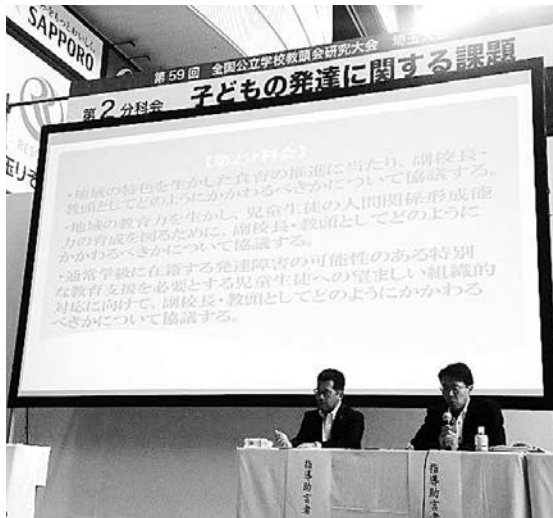
第2分科会

「子どもの発達に関する課題」に参加して

四日市市立楠中学校 平山 章

第2分科会では3本の実践提案がありました。

北海道帯広市立花園小学校の提案は、食育に対



しての教頭の役割についての研究でした。家庭、学校、地域、関係団体等が連携を図り、帯広市食育基本方針・計画を踏まえた食育を推進していました。また、小・中のつながりを大切にし、知・徳・体の調和のとれた「生き抜く力」を育むために、地域素材や地域人材を活用した取組を推進していました。その成果として、地域への愛着、帰属意識、食の大切さ、食や生産者への感謝の気持ちなど、心の教育にも繋がり食育の充実が図られました。

千葉県勝浦市立勝浦中学校の提案は、児童生徒数の減少により学校統合が進むなか、2つの研究のねらいを設定していました。1つ目は、人間関係に関する不安感を解消し、期待感と一体感を育むことでした。2つ目は、郷土を愛する心や地域への明るい展望を育む取組でした。成果として、人間関係づくりについて工夫・改善を図ることができ、子どもたちは学校や地域に愛着を感じ、貢献しようとする心の育成が図られました。

埼玉県加須市立種足小学校の提案は、通常学級に在籍する発達障害の可能性のある、特別な教育的支援を必要とする児童生徒への対応における教頭の役割に関する研究でした。関係諸機

関との連携、校内の組織体制づくり、保護者との信頼づくり、学級担任への支援等をあげていました。学校が組織的に取り組み「その子に合った教育の実現」を展開することが一番大切であるとの内容でした。

助言者からの、「ねらいを明確に示して校内指導体制を確立し、教育課程にしっかりと位置付けること。」「地域の宝である児童生徒の実態や地域のよさを踏まえた教育活動を展開していくこと。」の言葉が印象に残りました。

指導助言の校長先生からは、児童生徒の健やかな成長を実現するための副校長や教頭の役割について、

1. 学校経営方針を具体化する企画を提案すること、その際企画段階から担当者に関わらせること。
2. ねらいを明確に示して校内指導体制を確立し、教育課程にしっかりと位置付けること。
3. 関係教育機関との連携や地域、家庭等との信頼づくりを構築するためのネットワークづくりを推進していくこと。
4. 地域の宝である児童生徒の実態や地域のよさを踏まえた教育活動を展開していくこと。
5. 様々な教育活動を検証し、改善・削減・縮小等を通して教職員の負担軽減を図っていくこと、等について3つの提言を踏まえてお話をいただきました。



第3分科会

『教育環境整備に関する課題』に参加して

桑名市立久米小学校 堀田直人



第3分科会では午前中秋田県横手市による『学校統合にかかる「北中学校区スタンダード」の確立に向けた連携のあり方』の1本、午後は東京都荒川区による『地域の防災力向上に向けた副校長の役割』と埼玉県さいたま市による『特色ある学校づくりを支える教頭の役割』の2本、計3本の実践提案があり、提案ごとに質疑応答、グループ検討、発表という形式で分科会が進められた。

1本目の横手市の発表においては、教頭がチームとして小中一貫教育の必要性を理解し、小中連携教育推進委員会を核とした連携構築のために、連絡・調整・助言を行ったこと等が報告された。グループ内では、各地域の様々な小中連携のあり方が情報交換され、教員のモチベーションを高めるための工夫が必要であることや、連

携のための打ち合わせ時間の確保が難しいことが共通の課題であることがわかり、なかなか横手市のように進まない現状が話題となった。

2本目の荒川区の発表においては、区の方針により中学校で防災部（他の部活との兼部可）が設立され、中学生が中心となって地域における防災活動を展開し、地域住民と密接な関係を築いていった実践が報告された。グループ内では、荒川区ほどの取り組みをしている地域はなく、防災部については教頭の指導的役割が大きく負担となるのではという意見がある一方で、積極的に学校から地域に関わることで、地域の学校への協力が格段に上がるという意見も聞かれた。

3本目のさいたま市の発表においては、ASUKAモデルによる体育事故防止の取り組みや



食物アレルギーへの対応の取り組み等、ヒューマンエラーをいかに防ぐかという観点で全市をあげて実践していること等が報告された。グループ内でもさいたま市の取り組みを参考にしたいという感想が聞かれた。地域人材の活用については、地域連携は教頭の役割となっており負担感が大きいという意見で一致したが、地域の力を学校に借りる状況になってきており、教頭が

地域住民と顔をあわせ、つながっていく必要性が確認された。

最初は分科会の設定時間の長さに驚いたが、終わってみればあっという間であった。提言、グループ討議ともに全国の様々な情報を知ることができ、とても有意義な時間であった。学んだことを自校の状況に合わせて、学校運営に生かしていきたい。

第4分科会

「組織・運営に関する課題」に参加して

菰野町立鶴川原小学校 鈴木和夫

第4分科会では、3本の提言がなされ、50グループに分かれて協議した。1本目は、本県南伊勢町立南勢小学校の田辺宣昭先生からの「組織力を高めるための教頭の役割」についての提言だった。「どうせやらなあかんのならみんなでやろか」と地域の一斉防災訓練に学校行事として参加するなど防災教育を軸にして地域との結びつきを強め学校組織力を高める実践だった。

組織力の向上やパイプ役としての教頭（教頭会）の役割が明確化された取組や先生の防災に対する高い意識に他都県の先生からも賞賛の声が上がった。

2本目は、栃木県鹿沼市の小学校から「学校運営の活性化を図るための組織運営のあり方」についての提言だった。教職員の業務については担当者だけが把握し他の教職員には内容が見えていないということから、学校の組織運営の「みえる」「わかる」化に取り組み、教育活動計画のシンプル、ビジュアル、シェアをすることで、全職員が教育活動の全体像を把握でき、個々の業務が明確になり、学校運営が活性化した事例の報告があった。職員の学校運営への参画意識も高まる有効な手法であり、「教頭運行計画」「地域連携活動計画」など、ぜひ自分も取り入れたいと思った。

3本目は、埼玉県上尾市の中学校から「連携教育から一貫教育を進める上での教頭の役割」



についての提言だった。小中一貫教育への推進役・調整役としての教頭のあり方を明確にし、小中合同研修会等の実践事例や一貫教育PDCAサイクルを実施し組織力づくりに着手している等の報告があった。小中9年間を見通したカリキュラムの作成や一貫教育に向けた指導体制・研修体制づくりは参考になった。

私のグループは、岩手県、群馬県、埼玉県、東京都、愛媛県からみえた教頭で組まれており、それぞれの地域の状況や取組の交換も今後の教育活動に活けると確信した。1日目のシンポジウムや3日目の講演会も含め大きなお土産を手にした。

第5A分科会

「教職員の専門性に関する課題」に参加して

いなべ市立員弁東小学校 伊藤 国男

夏休みに入っても、慌ただしい生活が続く中、埼玉での全国教頭会研究大会に3日間も参加する機会をいただいた。日々の生活から離れ、心も体もリフレッシュできた3日間となった。分科会は2日目、ホテルから会場へ自分一人で慣れない電車と徒歩での移動であった。地図を読むのは得意であると自負していたが、駅で迷い、会場である大宮ソニックシティに入ってから迷いに迷って、ようやく着席することができた。時間に余裕を持って出発していたので、どうにか開始時刻には間に合った。

5A分科会では、滋賀県から「教職員の資質・能力を伸ばす地域連携の取組」について、群馬県から「教職員の指導力等の育成に関する教頭の役割」についての2本の提言があった。「教員が地域と連携して学校行事等を行い、地域を理解していくことはとても大切であり、教員の視野が広がっていく。教員に折衝や段取りをさせることで、企画力や調整力などの能力がついていく。」「教頭自らも学んでいかなければなら



ない。教職員とコミュニケーションをとり、信頼関係を築いていくことが教員を伸ばすことになる。」等の協議がなされた。

助言者の先生からは、「地域との連携や社会との関わりの中で、子どもたちだけでなく教職員の資質・能力の向上が図られている。教頭は、教職員に振り分け責任を持たせ、意欲を高めたり評価を行うことが重要である。」「教職員相互のつながりを作りながら、ミドルリーダーを育

てていくことや一人ひとりに責任を持たせ、指導助言しながらバックアップしていくことが教頭の役割である。」等の指導・助言をいただいた。

教職員の資質向上は、学校づくりの大きな課題である。個々の教職員の専門性を高めるため、組織を活用し具体的な取組の中で実践する事例

を学ぶことができた。グループ内では「総勤務時間の縮減」も話題となった。学校や地域によって、システムや状況は様々であったが、課題は共通していた。教頭として日々奮闘している「なかま」たちと共感し合い、元気をもらうことができた有意義な分科会であった。

第5B分科会

「教職員の専門性に関する課題」に参加して

松阪市立花岡小学校 塩 野 光 弘



第5B分科会では2本の提言がありました。

1本目は、「教職員の学校運営参画意識の向上を目指して～『危機管理意識』と『コンプライアンス意識』を醸成する研修を通して～」をテーマに岡山県美作市・西粟倉村公立小中学校教頭会から提言がありました。

教職員の年齢層の二極化が進む中、危機管理やコンプライアンス意識の向上に係る取組の担

当を校務分掌に位置づけ、ミドルリーダーの育成につなげることに取り組んだ実践が報告されました。

グループの協議では、単位教頭会として研修のねらいやながれを「校内研修パッケージ」としてまとめ共有化を図ったとの提言を踏まえ、学校独自の取組だけではなく、単位教頭会としての継続性や協働性に基づいて組織的に取り組んでいくことの意義や校内研修をコーディネートし教職員の学校運営への参画機会を創出することの大切さ等について話し合われました。

2本目は、「学校運営を活性化させるための教職員への指導～『若手教員』の育成と教頭の役割～」をテーマに埼玉県大里郡寄居町教頭会から提言がありました。

若手教員にアンケート調査を行い、課題意識の実態を把握し、教科の指導方法や学級運営等について直接指導にあたる一方で、ベテラン等の教員に対しては人事評価の自己評価の内容に若手教員の育成を盛り込む等、若手教員の指導

力向上を図る組織づくりに取り組んだ実践が報告されました。

グループの協議では、大量退職に伴い若手教員が増加する状況がある中、職員の同僚性を高めることやベテラン等の知識・経験豊富な教員のキャリア・ステージごとの人材育成がますます重要となっていることを踏まえ、中長期的な視点にたったマネジメントと具体的な体制づく

り等について話し合われました。

今回、この研修に参加させていただき、全国の副校長・教頭先生方と意見交換を行い、多様なマネジメントやそれに基づく具体的な実践等を知り、多くのことを学ぶことができました。このような機会を与えていただき、ありがとうございました。

第 6 分科会

「副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題」に参加して

鈴鹿市立鼓ヶ浦中学校 西 村 茂 也

全国公立学校教頭会は、組織として「教育行政提言能力」があり、昨今、文部科学省・教育行政・国会議員等から意見具申を多く求められるようになってきたそうです。日頃の仕事に忙殺され、そのようなことには、まったく無頓着な自分がある中、興味・関心の湧く分科会でした。全公教からの平成29年度要請事項の柱は以下の3つでした。

「義務教育国庫負担制度の全額国庫負担化及び人材確保法の趣旨を堅持する施策」

「学校教育の質の向上と学校の組織的運営を支援する施策」

「学校・家庭・地域の連携・協力を深める教育環境整備のための施策」

これを受けて、文部科学省初等中等教育局財務課長の伊藤学司先生から講話をいただきました。その中で印象に残ったのが、『学校の機能強化』『総勤務時間の縮減』のため、教員が担うべき業務や役割分担を明確化し、「チーム学

校」として専門的スタッフ（SC・SSW・特別支援教育支援員・学校司書・ICT支援員等）を整備するということです。しかし、ここで教頭のマネジメント力が問われます。どれだけ有能な人材が配置されてもそれを活用できなければ宝の持ち腐れになりますから。

グループ討議では、「教頭職がミドルリーダー



として、あこがれる存在になるためには」をテーマに話し合いました。管理職を目指す教諭が減少する中、タイムリーで喫緊の課題だったのですが、日々仕事に追われる中で、なかなかそのようなことを意識できずに、教頭の魅力・やりがいを伝えられないどころかマイナスのイメージを醸し出している！というのが多くのグループの第一声でした。しかし、討議を進めていく中で、「大変さ」を見せるのではなく、いきいきと仕事を推進し、組織を動かす姿を見せること。

気持ちよく報告・連絡・相談ができるような姿勢を示し「いつでも頼れる教頭」として対応していくこと。「あとで」ではなく、「すぐに」の対応をし、信頼を高めることなど、あるべき姿の教頭職を見つめなおす機会になりました。

今大会で、全国の教頭先生と出会い、多くのことを学ぶことができました。この学びを今後の自分自身の肥やしに少しでも成長できればと思います。

特 I 分科会

「まずは……教職員の意識改革を！」

四日市市立河原田小学校 松岡佳代

特別分科会 I は都留文科大学 山辺恵理子氏を講師に招き、「グローバル社会を生き抜く児童生徒の育成をめざして」をテーマに4つの視点から講演をしていただき、その後参加者約260名が40グループに分かれて演習を行った。

一つ目のキーワードは「点から面へ」

5歳～12歳までアメリカで過ごされ、日本に戻ってきた山辺氏は学校教育の考え方の違いに驚かれたのだそうである。社会がグローバル化に向けて大きく変化する時代に、旧態依然の授業を取り入れている日本。今こそ主体的、対話的で深い学習（アクティブラーニング）を組織として取り組む必要があることをソクラテスの言葉を引用して力説された。「力強い心の持ち主はアイデア（ex.今後の教育）について話し合い、平凡な心の持ち主は出来事（ex.授業）について話し合い、弱い心の持ち主は人について

話し合う」教員がアイデアを出し合い、授業改革を組織的に取り組む必要性を感じた。

二つ目のキーワードは「リアルなグローバル化を見据える」

今後はより広い職種で、英語圏以外の人々と接する機会が増え、グローバル化の波は社会全



体に広がっていく。演習ではイメージカードの中から現在と20年後の学校生活をイメージしたカードを選び、そのカードについて話し合い、今後の子どもたちに必要な力について議論した。グローバルというと、英語に特化してしまいがちだが、何より子どもたちにつけなければいけないのは「違いを認める力」「コミュニケーション力」であることを確認し合った。

三つ目のキーワードは「教育の温故知新を進める」

「トロンペライ」の話を聞いた後、私たち教師が学校教育の中で当たり前のように受け入れている学校文化や慣習はないか、別の可能性を切り拓くために思い切って捨てるべきものはないかについてグループで話し合った。学校教育の現場では足し算ばかりしてしまいがちだが、引き算することも大切にしていきたい。

四つ目のキーワードは「経験から自ら学び続けられる生徒を」

自己効力感を高め、また異文化などの違いを理解し、受容する心を育てるためには、自他の



よさを見つめる「強みを生かすリフレクション（振り返り）」や思考・欲求・行動を深く理解する「8つの問い」を生かしたコミュニケーションが有効であると教えていただいた。そのためには、まず私たち教職員が自分の目標や強みを見失わず、自己肯定感を高めていきたい。

グループ演習では、関東圏の先生方と学校運営についても交流し合い、大変有意義な時間を過ごすことができたことに心から感謝している。

特Ⅱ分科会

学校の最低限かつ最大の責務は、預かったお子さんをそのままでの姿で家庭に帰すこと

鳥羽市立加茂小学校 嶋 谷 潔

特Ⅱ分科会は開催県が独自に課題を設定する分科会です。今回、埼玉県教頭会は、「子どもが学校で倒れたとき、子ども達の命を守るために ASUKAモデルへの想い ～学校事故におけるBLS教育とコンフリクト・マネジメントについて～」のテーマを設定し、約300人が参加

して行われました。

○ASUKAモデル

さいたま市立小学校の6年生が課外練習中に倒れ、救急搬送された翌日に死亡するという事故を教訓に、ご遺族と学校、市教育委員会が協力して教員研修のための事故対応テキスト「体

育活動等における事故対応テキスト～ASUKAモデル～」を作り上げました。

分科会では、このテキストの作成に関わったご遺族の桐田先生、当時のさいたま市教育長の桐淵先生の講義をもとに、協議が進められました。桐田先生からは、当時の事故対応の問題点、不誠実な学校の対応などの話がありました。また、桐淵先生からは、ASUKAモデル作成の経緯とその内容についての話がありました。

OBLSとコンフリクト・マネジメント

BLS（Basic Life Support）とは、心肺停止状態の人に対して行う一次救命処置を指します。AEDの普及に伴い一次救命の重要性が認識されたことによって、救急車が到着するまでに学校が何をしたか、あるいはしなかったかが問われるようになりました。管理職を通じて119番通報するのではなく、手遅れになる前に現場にいる教員がその場ですぐに119番通報できる学校体制にすることこそが管理職の責務であるということでした。

また、学校で事故が起こったとき、学校側が

事故の当事者（保護者等を含む）とのコンフリクト（衝突・争い・対立・葛藤）にどのように対処し管理していくかは、学校側の交渉者となることが多い教頭にとっては重要な課題です。

学校事故への基本的な態度として、次の3つが午後の協議でも話題の中心になりました。

- ①預かったお子さんをそのままの姿で家庭に帰すのが学校の最低限かつ最大の責務
- ②隠さない、誠実に対応する、被害者に寄り添う
- ③道義的責任と法的責任は別（責任追及を恐れず謝罪の言葉を口にしないのは誤り）

実際の事故と科学的な分析をもとに作られたASUKAモデルは、そのときその場で当事者として自分が何をすべきかが明確に示されています。ぜひ一度ご覧いただき、学校事故対応の参考にしてください。

《ASUKAモデル》

<http://www.city.saitama.jp/003/002/013/index.html>

《日本AED財団 減らそう突然死プロジェクト》

<http://aed-project.jp/movies/movie5.html>



「湯釜」

四日市市立中部西小学校 松 坂 到

今年の夏、長野県に帰省した際に30年近くぶりに群馬県草津町にある「湯釜」を見てきました。「湯釜」とはご存じの方も多いと思いますが、有名な草津温泉の西の白根山頂にある直径300mほどの火口湖です。この火口湖を30年近く前、初めて見たときにその色に感動し、いまだに鮮明に記憶に残っていました。

2014年3月ころから、火山活動の活発化から周辺への立ち入りが制限されており、「湯釜」も地上からは見ることはできませんでしたが、今年の6月に解除されていたと聞いて、久しぶりに見てみたくなり行ってみました。

長野県側からは、上信越自動車道の信州中野ICを降りて、スキー場で有名な志賀高原に向かって山道を登っていき、群馬県に入ればしばらく行くと、左側に大きな駐車場とレストハウスが見えてきます。途中はよく整備された道路で、眺めも抜群、ドライバーは気分よく運転できます。同乗者は車酔いに注意ですが・・・。

駐車場についてみると、その風景から最初に訪れた時の記憶が少しずつ蘇ってきました。以前は、駐車場からまっすぐ火口に向けて登って、「湯釜」の真上から湖面を覗き込んだように思いましたが、今は500m以内立ち入り禁止ということで、「湯釜」を大きく回り込むようにして遠回りして山を登り、遠く離れたところから「湯釜」を見るようになっていました。500m以上離れていても、その色に

は改めて驚かされます。本稿の写真は白黒なのでその色は伝わらないと思います。どのような色か見たことのない方はネットで検索してみてください。この火口湖の水は強い酸性で、溶け込んでいる鉄イオンや硫黄などの影響で特定の光の波長が吸収されてこのような色として私たちの目にみえているそうです。

登った直後に目にした色に感動したのですが、この時の色は霧がかかっており、本来の色より少し暗かったということが後にわかります。しばらくして霧も晴れ、真夏の太陽が顔を出すと、まったく別の色のように鮮やかに輝いて、1度登っただけでしたが、2度目の感動を覚えました。

30年たっても変わらない神秘的な色を発している不思議さと、一瞬の間でも、太陽光の当たり方によって、鮮やかに輝いたり、暗くもなったりする様子が、子どもが教師や親の様子を写す鏡であるのと同じだなあと思いながら「湯釜」を後にしました。



郡市だより

地域とともに実現した校舎移転

亀山市立川崎小学校 飯 場 寿 美

本校は亀山市の北部に位置し、3つの川の流域に発達した農村地帯と新興住宅地で形成されています。近年、校区に住宅やアパート等が建設され、本校の児童数も年々増加しています。

昨年度より新校舎建築のための工事が進められています。平成28年8月に起工式を終え、平成29年4月には、新校舎の一部である北棟と南棟が完成しました。

5月2日、子どもたちは自分のいすや机を持って、新しい教室に引っ越しました。「木の匂いがする」「毎日学校に来るのが楽しい」と喜びました。

5月13日、理科室や図書室、職員室等の大規模な引っ越しを、学校と保護者、地域、教育委員会が協力しながら行いました。

当日は自治会から100名、保護者150名の参加があり、総勢約330名が引っ越し作業を行いました。重い荷物や運びにくい物もありましたが、それぞれの担当場所に分かれて、声を掛け合いながら半日ですべての荷物を運びました。

終了時に自治会長代表の方が、「新しい川崎小学校に生まれ変わるが、これまでの伝統や校風を大事に受け継ごうとしている姿がうれしい。また、大勢の人が引っ越しのために協力して作業を進める様子を見て、災害時にも助け合える地域だと心強く感じた」と、あいさつをされたのが印象的でした。

5月20日には、土曜授業で「旧校舎お別れ集会」を行いました。集会の最後には、全校児童が、将来の夢を書いた短冊をつけて450個の風船を飛ばしました。



その後、風船に書いてあった学校の住所を見て、県内外から30通余りの励ましのお便りをいただくという嬉しいおまけもありました。奈良県吉野小学校からは4年生全員から便りが届き、それに本校の4年生が返事を書いて、新しい交流が生まれました。

6月19日に行われた運動会では、川崎小学校の移り変わりを5・6年生が組体操で演じました。「旧校舎とお別れ、たくさんの人たちのあたたかさの中で生きていく」等のナレーションが流れる中、川崎の歴史や文化の移り変わりを、暑い中で汗を流しながら、校舎やその時代を表現する子どもたちの姿に、保護者や地域の方々が大きな拍手を送っていました。

引っ越しはとても大変な作業でしたが、自分たちの学校、川崎の学校を良くしていくのだという

地域全員の思いが一つにまとまり大きな力となって、移転が実現しました。

今後、中棟ができあがり、新校舎全部が完成するのを、子どもたちや保護者の方々、地域のみなさんと楽しみに待ちたいと思います。

